

複合動詞「くこむ」の分類とその用法

甲斐 朋子

はじめに

日本語の動詞の中には「食べる、飲む、見る、読む、話す、ある、富む」などのように、一語で事物の動作、作用や存在、状態を表すものほかに、「笑いこぼる、走り回る、食べ歩く、飛び込む、そびえ立つ」などのように二つの動詞を組み合わせて表現する複合動詞と呼ばれるものがある。日本語話者にとってはどちらの表現も意識せずに使いこなしているものであるが、日本語学習者にとってはそうではない。日本語の教科書の中で、一語の動詞(単純動詞)に比べ、複合動詞が学習項目の中で占める割合が低いということもあって、これを使いこなすには時間とコツがいる。

本稿では複合動詞と称される語群の中から「飛びこむ、買いこむ、考えこむ」などに見られる「くこむ」を選び、辞書の説明だけでは分かりにくい実際の方法とその分類を

研究の対象とした。

研究方法としては、先行研究である姫野氏(一九七八)の巻末リストから、複合動詞「くこむ」(二七五語)を得るとともに、リストに挙げられている「くこむ」の実際の用例を「CD-ROM版 新潮文庫の一〇〇冊」や、「類語国語辞典」などから抽出し、それを分析、分類した。

一、日本語教材における複合動詞の扱われ方

森田良行氏(一九七八)の調査によると、『例解国語辞典』(時枝誠記編、中京出版、昭和三一)の中の動詞比率は以下の「表一」の通りである。この中の複合動詞数は一、八一七語で、三九、二九%となっており、動詞全体の中で約四割を複合動詞が占めているということになる。

表一、『例解国語辞典』の動詞比率(森田、一九七八より)

計	A	B	C	D	見出し語数	比率(%)
	単純動詞	複合動詞 (1)	複合動詞 (2)	空見出し		
	二、〇八三	一、八一七	五七三			四五、〇七
		三九、二九	一一、四			三九、二九
			一四九			三、二二

A 単一の和語動詞 B 動詞+動詞、動詞+動詞造語成分 C サ変複合動詞 D 名詞、形容動詞語幹、接頭辞+動詞、動詞的造語成分、動詞的接尾辞(森田氏による)

しかし、これらの数値は『例解国語辞典』に収録された語数によるものであって、実際にはこれよりはるかに多くの複合動詞があるにちがいないと森田氏が指摘しているように、実際に新聞などの中にでてきた複合動詞「くこむ」について探しても、載っていない語がいくつもあった。このように辞書に載っていない複合動詞の数を含めると、実際の日本語の表現の中で、複合動詞が占める割合はかなり高くなると言える。しかし、多くの場合初級日本語の教科書の中で複合動詞の占める割合は低いようである。

日本語教材の一つである『文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』につ

いて、見出し語の動詞を調べてみると、「ある、いる、いく、おきる、する……」のような単純動詞が二八七語「勉強する、運動する、買い物する……」といったサ変動詞が八四語、「ご覧になる、差し上げる……」などの敬語動詞が四語、「くてある、くていく、くておく……」等、日本語教育界でいうところの「て形」の表現、「形容詞+すぎ(例:遠すぎる)」、「動詞+接尾辞(例:ならいたがる)」という表現を除いた複合動詞は以下のとおりである。

- ・あてはまる・あるきはじめる・いいだす・うけいれる
- ・うけとる・うりだす・かたづく・かたづける
- ・くみたてる・にあらう・のりおくれる・のりかえる
- ・はなしあらう・はりかえる・ひきだす・まきもどす
- ・まにあう・みかける・もちこむ (計一九語)

これらの複合動詞を含めた全動詞の数は三九五語(二八七十八四四十一九〇三九四)、複合動詞は動詞全体の数の約五%にすぎない。このことは『文化初級日本語』に限ったことではない。森田氏によると早稲田大学語学研究所編の『外国学生用日本語教科書・初級』において三八語の動詞がある中で、複合動詞は

- ・思い出す
- ・とけこむ
- ・まにあう
- ・申し上げる
- ・役立つ

の五語にすぎず、ほかに動詞的造語成分(複合動詞の後接

部分)として

くおわる、くだす、くつづける、くはじめ

の四語が現れるだけだと述べている。

日本語学習者が複合動詞が使えないからといって日常生活に支障をきたすわけではない。初級の教科書の中の単純動詞で説明しようと思えば、大まかな説明になるが可能である。しかし、細部の微妙な差異を表現するときには、複合動詞による表現を使ったほうが日本語話者にとっては表現された内容がより鮮明にその差異を描写していると感じることがある。例えば会社などで、顧客からある注文を引き受けた場合、それがかなり面倒な手続きを要するものであると言いたいとき、以下のような二つの表現が成り立つ。

a、我が社は、厄介な問題をかかえることになる。

b、我が社は、厄介な問題をかかえこむことになる。

aとbが表す状態は微妙に違う。この微妙な差は「こむ」を「かかえる」という動詞に後接させることによって生じるものである。

二、複合動詞「くこむ」が

複合動詞全体の中で占める位置

「複合動詞」と呼ばれるものにはどのような語構成の種類があるのだろうか。森田氏(一九七八)が複合動詞としてあげているものをみてみる。

① 動詞+動詞

(呆れ返る、明け放す、食ってかかる、受けて立つ、など)
② 動詞的造語成分や接尾辞と複合したもの
(当て込む、洗いたてる、あわてふためく、など)

③ サ変複合動詞

(愛する、相對する、汗する、値する、甘んずる、など)

④ 名詞

⑤ 形容詞語幹

動詞

相手取る、相成る

青ざめる、垢じみる

⑥ 形容動詞語幹

+ 動詞的造語成分

赤茶ける、垢抜ける

⑦ 接頭辞

動詞的接尾辞

赤み走る、赤らむ

悪たれる、汗ばむ

森田氏は「くこむ」の「こむ」を動詞的活用をする接尾辞ととらえ、「動詞+動詞」の範疇に入れていない。

次に寺村氏(一九八四)がアスペクト形式の認定を行う際に、「動詞連用形+動詞」という複合形態素を、それを

構成する前項、後項の独立性という点から四つのタイプに分類したものについて見てみる。

- (イ) V-V: 呼び入レル、握リップス、殴り殺ス、など
- (ロ) V-V: 降り始メル、呼びカケル、思イ切ル、など
- (ハ) V-V: サシ出ス、振り向ク、引キ返ス、など
- (ニ) V-V: 払イ下ゲル、(話ヲ) 切り上ゲル、(芸ヲ) 仕込

む

V…: 単独で使われるときの意味、文法的特徴が複合体の中でも保持されているもの。

V…: 単独で使われるときの意味、文法的特徴が複合体の中とは全く、あるいはかなり違っているもの。

寺村氏は複合動詞「〜こむ」の「こむ」を動詞と見なし、その中で「単独で使われるときの意味、文法的特徴が複合体の中の場合とは全く、あるいはかなり違っているもの。」として扱っている。

以上のように、それまで意味と格関係から分類されることの多かった「動詞連用形+動詞」の複合動詞を、森山氏(一九八八)は更に構造の違いから次の三つに分類している。

〈複合動詞の分類〉

① 統語論的複合動詞

しかける、しはじめる、しだす、しつづける、しおわる、

しそこなう、しのこす、しわすれる、しすぎる、し(やり)合う、し(やり)返す

② 半統語論的複合動詞

やりきる(しきる)、やり遂げる(し遂げる)、やりあげる(しあげる)、やり尽くす(し尽くす)、やりおおす(しおおす)

③ 語彙論的複合動詞

V V型: 前項が接頭語的なもの

(うちたてる、ぶっころす、とりまとめる、等)

V v型: 後項が接尾語的なもの

意味的な中核は前項であるが、格関係は接尾語の部分によって決まる。

(殴り込む、飲み込む、申し付ける、逃げ込む、飛び掛かる、等)

V V型: どちらも意味を残し、「〜して〜」の形になっているもの

(ひっぱりあげる、歩き疲れる、ずり落ちる、等)
v v型: 意味が不透明になっているもの
(仕込む、打ち解ける、等)

森山氏の分類によれば、複合動詞後項「こむ」は、複合動詞の語構造から見ると、「語彙論的複合動詞」に位置し、複合動詞を構成する要素としては、接尾辞として扱う場合

と、動詞として扱われる場合とがあると述べている。

本論では以上のことから「こむ」を「子供ら、お父様、長め、落ちめ」などを含む接尾辞と区別するため、動詞として扱う立場をとる。

三、複合動詞「こむ」についての先行研究

姫野氏（一九七八）は、複合動詞「こむ」を大きく「内部移動」と「程度進行」とに分けている。姫野氏によれば、「内部移動」に属するものは、「こむ」という複合動詞のうち約八割を占めており、その特徴は、主体あるいは対象がある領域の中へ移動することを表すとある。姫野氏は「に」で示される移動先を、さらに「移動先の領域の形態的特徴」から次のような七つのグループに分けている。

- ① 閉じた空間
- ② 固体
- ③ 流動体
- ④ 間隔のある集合体または組織体
- ⑤ 動く取り組み体
- ⑥ 自己の内部（自己凝縮体）
- ⑦ その他

「程度進行」に属するものについては、その特徴として動作・作用の程度が進行することを表すとし、「程度進行」に属する語を、「進行の様態」にしたがって次の三つのグループに分類している。

- ① 固着化
- ② 濃密化
- ③ 累積化

姫野氏は「内部移動」に属する語の分類基準に、「移動先の領域の形態的特徴」を用いているが、日本語学習にとつては、このことだけから「内部移動」を表す「こむ」の全体像を理解することは難しいと思われる。

例えば、姫野氏があげている「内部移動」―2の例文「針金が体に食いこむ」という文を学習者が学習するとき、分類によれば、「食いこむ」の主体の移動先は「固体」を表すと習うわけだが、次のような場合はどのように説明するのであろうか。

「一時間目の授業が、休み時間に食いこむ」

この場合の「食いこむ」の移動先は固体ではない。①のうちのどこに当てはめればよいのだろうか。

また、「流れこむ」、「溶きこむ」の移動先は①の「閉じた空間」とされているが、「溶けこむ」、「溶かしこむ」、「沈みこむ」などの移動先は③の「流動体」とされている。姫野氏による①と③の定義は、以下の通りである。

①「閉じた空間」とは、外部と一線を画する境界線によって生じる領域である。それが建築物のような立体空間であっても、単なるゴールや木の下というような平面上の領域であってもよい。

例：「飛びこむ」という動詞の移動領域

…家、茂み、海、目の中、実業界

この例について姫野氏はこれらの移動領域の形態は一樣ではないが、「ある境界（わくぐみ）を越え、内部に入る」という点で共通していると述べている。

③「流動体」とは、水や汁などの液体、泥など液体に準じるもの、空気などの気体をいう。

③に分類されている語は全部で9語であるが、

（漬かりこむ、溶けこむ、ひたりこむ、しずみこむ、もぐりこむ〔自動詞〕、漬けこむ、溶かしこむ、ひたしこむ、沈めこむ、〔他動詞〕。この中で自動詞であるものは「しずみこむ」を除いた全てが、姫野氏の分類による①「閉じた空間」をも移動領域とすることができる。）

例…「太郎は新しい職場に溶け込んだ。」

「毎日のように、子供たちは蝗のようにそこらを飛び歩き、伊豆屋の広い庭にもぐり込んだし、…」

「あすなる物語」

このように、「内部移動」に属する語を「移動領域の形態的特徴」によって分類しても、その移動領域が一つには収まり切れず、二つにまたがる語がいくつも見られる。

また「内部移動」の七項それぞれに〈N〉が〈N〉に〈こむ〉（姫野氏〓Nは名詞を表す）などの文型があげられているが、主体となるものについての情報が「名詞」と

いうだけではあまいで、主体は「人」なのか、「物」なのか、「事柄」なのか、またはこれらのどれでも主体となり得るのかははっきりしない。

このような点から考えても、この分類方法だけで、日本語学習者に「内部移動」に属する複合動詞「こむ」を説明することは難しいと思われる。

次に森田氏による分類をみてみる。森田氏は「基礎日本語辞典」（角川書店（一九八八）において、まず、複合動詞「こむ」が自動詞であるか、他動詞であるかで大きく二分している。そして、それぞれを

①「ある領域へと入っていくようになる／いくようになる場合」

②「動作・状態をより深い域へと進め入れる場合」とに分けている。

自動詞で①に属する語は次のような助詞との結び付きが見られるとしている。

◇「…ガ…ニ…込む」…「に」格は「…」の中に、場所・事柄を表すとし、姫野氏のように、「移動領域の形態」による分類はしていない。このグループに属する前項動詞の特徴は、動作性の動詞や移動を表す動詞等とし、それらについて「こむ」は「その場所や、事柄の中に入っていく」という具体的な行為・作用を表すと分析してい

る。この「くこむ」によって表現されたものは、意志的、無意志的自然現象など種々の例が見られると述べている。自動詞で②に属する語は次のような文型をとり、

◇ 「…ガく込む」…主として状態性の動詞、または動きを伴わぬ動作性の動詞について、その状態や行為がより深まっていくさまを表す。「ひどく…だ」の強調となると分析している。

他動詞で①に属する語は下のような助詞との関係をとる。
◇ 「…ヲ…ニく込む」…「に」格は「…」の中に、場所を表す。この「に」格を立てることによって、話題の場所の中に入れていく、という具体的な行為となるとしている。

例：「相手を窮地に追い込む」「新手を前線に送り込む」
「手帳にいろいろなことを書き込む」

人や事物がある場所・状況へと入っていくようにする。
「ある領域の中へ入れる」という点で、具体的な行為であり、「…して入れる／…しながら入れる／…することによって入れる」という意味関係をなすとしている。

次に、他動詞で②に属する語を次のような3つに分けている。

a、◇ 「…ヲく込む」…対象に対してその動作や、行為が深く入っていく。つまり、その対象を十分に行

うこと。

例：「遺産を当て込む」「食料を買い込む」

「仕事をたくさん抱え込む」「たくさん着物を着込む」

「疾病神をしょい込む」「草を刈り込む」

b、◇ 「…ニ…ヲく込む」…特定の相手に対してある行為を十分に行うこと。「徹底的に…する」行為であって、「に」格は「…」に対しての意味であり、先上げた他動詞で①に属する語とは似て非なる文型としている。

「犬に芸を教え込む」「女中に行儀作法を仕込む」

「頭にたたき込む」「頼み込む」「女に金をつぎ込む」

c、◇ 「…ヲ…トく込む」…その対象を…であると完全に…する「精神的判断」。「Aヲトく込む」で、A

|| Dと見なす。

例：「嘘を本当と思ひ込む」「息子を不良少年と決め込む」

「相手をひとかどの人物と見込んで期待する。」

「く」とで括られる部分(句)は、「AハDダトく込む」の形をとる場合も多いとして下のような例を挙げている。

「今日は月曜日だと思ひ込んで、日曜日に学校へ行く」

「弟も行くものと決め込んで準備を進める」

再び、日本語学習者の立場からこの分類を見てみることにする。

ママンがここにいたときは便利だった。今では私にはひろ過ぎるので食堂の机を 私の部屋へ 運び込まなければならなかった。 (異邦人)

例えば、日本語学習者が上のような文章を読み、ここで「込む」の働きを知ろうとしたとき、森田氏の分類を参考にすることができる。該当する文型を探すと、「…ヲ…ニ…込む」という、他動詞の①である。ここでの「込む」は「…に」で表される場所の中に入れていく、という具体的な行為を表す。

「食堂の机を 運んで 私の部屋へ 入れる」というような意味関係になる。

では、次のような場合はどこに該当するのであろうか。

「みんなは社長に ほれ込んでいるようですよ。」

(女社長に乾杯)

この「ほれ込む」は、文型によれば自動詞の①「…ガ…ニ…込む」にあたるが、森田氏は、このグループに属する前項動詞の特徴は、動作性の動詞や移動を表す動詞等とし、それらについて「こむ」は、その場所や、事柄の中に入っていく、という具体的な行為・作用を表すとしている。こ

のことから考えると、「ほれ込む」の前項動詞「ほれる」は、自動詞の②の「主として状態性の動詞、または動きを伴わぬ動作性の動詞について、その状態や行為がより深まっ ていくさまを表す。…ひどく…だ」の強調となる」のほうに適している。このように、文型による分類だけでは当てはめ切れない例がいくつも見られる。

車輪が ぬかるみに めり込む。

(類語国語辞典)

この場合も自動詞の①の文型にあたるが、この前項動詞は現在では単独では使われていないため、車輪がどのような状態に入るのかが、日本語学習者にとってはとらえにくいのではないか。

複合動詞「…込む」の中には、「めり込む」のほかにも、「仕込む」「すっこむ」など、前項が現在では単純動詞としては使われていないものや、

「食い込む…針金が体に食い込む」、

「振り込む…私は彼の口座に一万円振り込んだ」

このように、前項動詞の意味、文法的特点が、単独で使われている場合と複合動詞の中とで違うものがある。このような語は取り出して、別のグループとして分類した方が繁雑にならない。

四、複合動詞「〜こむ」の分類基準及びその分類方法

今回筆者が行った分析によると、現在の複合動詞「〜こむ」の用法は、以下の四つに分けられる。

i、複合動詞後項の「こむ」が、単純動詞「こむ」の用法と同じで、「ある場所いっぱいに入人や物が入り合う。また、用事などが一度に重なり合う。」という働きをもつ例が二例。(とりこむ、たてこむ)

ii、複合動詞後項の「こむ」が、単純動詞「こむ」の用法と同じ「複雑に入り組む。精巧に作られる。」という働きをもつ例が一例。(いりこむ)

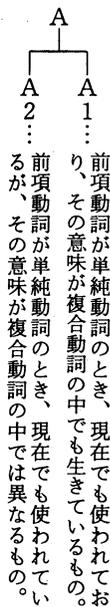
iii、複合動詞後項の「こむ」が「〜の中に入れる／入る」という働きを持つ用法が一五〇例。

iv、複合動詞後項の「こむ」が、「十分に〜する。すっかり〜する。」などのような、前項動詞の程度を深める用法が一〇八例。(※iii、ivの両方に属するものは、それぞれ一つの用法として教えた。)

この分類のうちiiiとivの用法について、前項動詞が単純動詞のときの格支配と複合動詞「〜こむ」の格支配にはどのような関係があるのか。また、「こむ」が前項動詞のどの程度を深めていくのかについて分析を行った。

まず、複合動詞「〜こむ」を「前項動詞が単純動詞のみの形で、現在でも使われているのかどうか。」という観点からAとBに分けた。(「〜こむ」の分類表参照)

次にA:「現在でも使われているもの」の中で、「前項動詞の意味が単純動詞のときと複合動詞のときで同じか否か」という点で、A1とA2に分けた。したがって、前項動詞の種類により、複合動詞「〜こむ」を次の三つのグループに分けることができる。



B:.....
前項動詞が単純動詞の形をとるとき、現在では使われていないもの。

次に、A1、A2、Bに属する語を、それぞれ「こむ」に「入る／入れる」という語に代表される「内部への動き」を表す働きがあるか無いかで、(ア)、(イ)に分け、(ア)の「入る／入れる」の意味を表す動きがあるものを、複合動詞全体で自動詞か、他動詞かという点から更に二つに分けた。

「内部への動き」を表す「〜こむ」の前項動詞には、次のような違いがみられる。

(1) a : 花子が 楽屋に 駆ける ×

b : 花子が 楽屋に 駆けこむ ○

(2) a : 花子が 楽屋に 逃げる ○

b : 花子が 楽屋に 逃げこむ ○

そこで、A1の(ア)についてはさらに、前項動詞が單純動詞のとき動作の方向を表す「く」に「へ」を格支配するかしないかによって二分し、それらの單純動詞が自動詞か他動詞かで最後の分類をした。

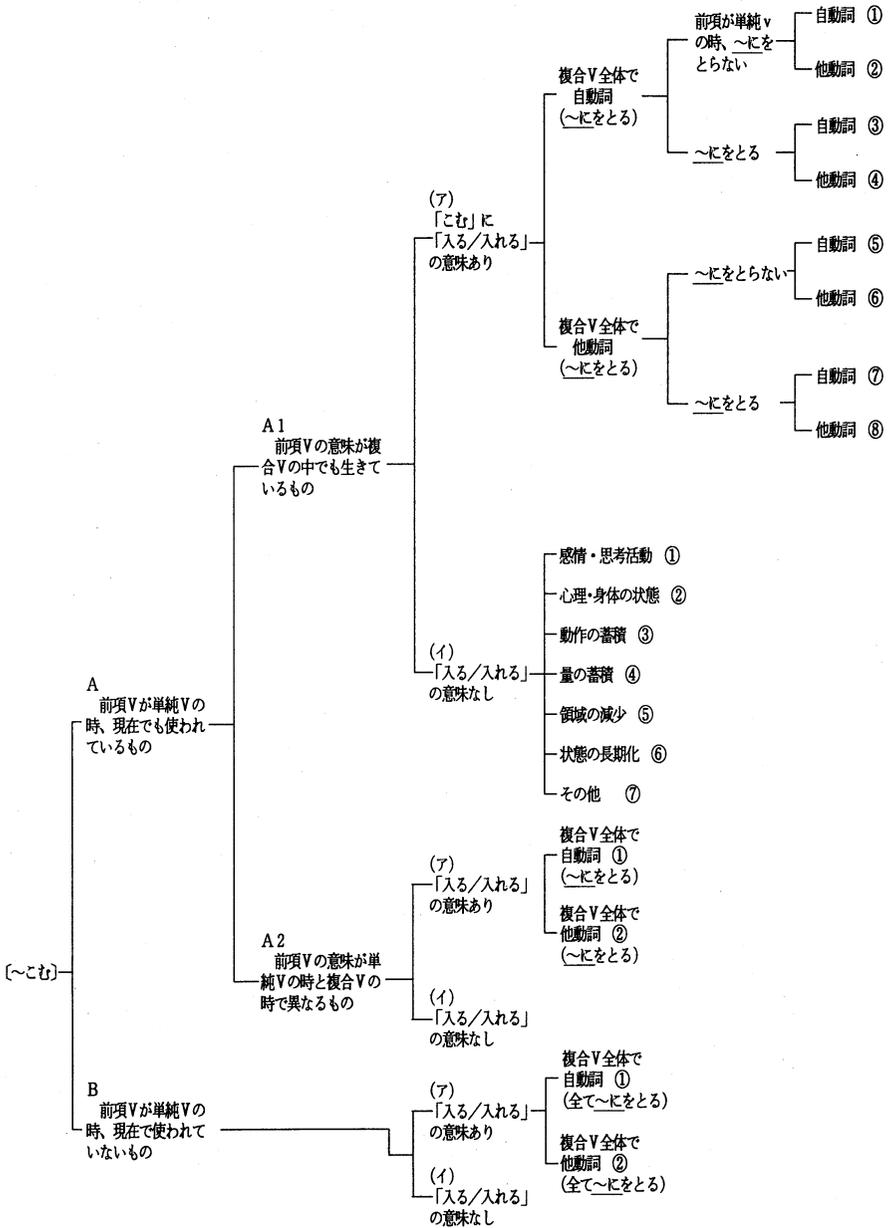
A1の(イ)では、「こむ」が、前項動詞の何の程度を深めているかに着目し、それらを七つのグループに分類した。

A2とBについては、前項動詞の意味と文法的特徴が複合動詞の中では変わっており、前項動詞+「こむ」と扱うよりも「くこむ」を一語として扱った方が日本語学習者にとっては理解しやすいのではないかと考え、これ以上の分類を行っていない。

iii、ivの用法の「くこむ」についての分類は、次の分類表のとおりである。

- A1(ア)① おどりこむ、おれこむ、かけこむ、射しこむ、さまよいこむ、すべりこむ、てりこむ、どなりこむ、とびこむ、はいこむ、はしりこむ、ふきこむ、ふりこむ、まいこむ、まよいこむ、まわりこむ、もつれこむ、よろけこむ
- ② 攻めこむ、ふみこむ、わりこむ／なぐりこむ、きりこむ／もちこむ、つれこむ
- ③ うまりこむ、うまれこむ、おちこむ、ころがりこむ、ころげこむ、しずみこむ、しのびこむ、しみこむ、ずれこむ、つかりこむ、とけこむ、にげこむ、のりこむ、はいりこむ、はまりこむ、ひたりこむ、まぎれこむ、まじりこむ、もぐりこむ
- ④ なし
- ⑤ なし
- ⑥ あみこむ、追いこむ、押しこむ、折りこむ、織りこむ、かつぎこむ、組みこむ、けずりこむ、こすりこむ、鋤きこむ、すくいこむ、擦りこむ、たたきこむ、たたみこむ、つつこむ、ぬいこむ、ねじりこむ、ねりこむ、ひきずりこむ、ひねりこむ、ふるいこむ、吹きこむ、ふみこむ、まるめこむ、もみこむ／ききこむ、とりこむ、すいこむ、すすりこむ、のみこむ、よみこむ／みこむ
- ⑦ なし
- ⑧ いれこむ、うえこむ、うずめこむ、うちこむ、うつしこむ、うみこむ、うめこむ、えがきこむ、おくりこむ、おとしこむ、かかえこむ、書きこむ、掻きこむ、かくしこむ、きざみこむ、汲みこむ、くりこむ、くわえこむ、けずりこむ、けりこむ、さしこむ、さそいこむ、しずめこむ、しぼりこむ、刷りこむ、擦りこむ、そそぎこむ、だきこむ、つぎこむ、つけこむ、つみこむ、とかしこむ、とじこむ、ながしこむ、なげこむ、ぬりこむ、はこびこむ、はきこむ、はめこむ、はらいこむ、ひきこむ、ひだしこむ、ほうりこむ、ほりこむ、まきこむ、まげこむ、ませこむ、まねきこむ、まぶしこむ、もりこむ、よびこむ、くرمこむ、つつみこむ
- A1(イ)① おもいこむ、きおいこむ、きめこむ、しんじこむ、みこむ／ほれこむ／おぼえこむ
- ② かんがえこむ、こまりこむ、しょげこむ、だまりこむ、弱りこむ、おちこむ、しずみこむ、ふさぎこむ、老いこむ、おいほれこむ、老けこむ、ぼけこむ、やつれこむ、よわりこむ／ひえこむ
- ③ うたいこむ、およぎこむ、かきこむ、きたえこむ、なげこむ、はしりこむ、弾きこむ、よみこむ／あらいこむ、にこむ、掃きこむ、みがきこむ／おしえこむ、おがみこむ、たのみこむ、なきこむ／
- ④ 買いこむ、かりこむ、きこむ、かぶりこむ、たくわえこむ、たべこむ、ためこむ、はきこむ、めかしこむ、かかえこむ、しょいこむ、せおいこむ、くらいこむ／きせこむ、かぶせこむ、はきこむ
- ⑤ きれこむ、はげこむ、わりこむ／つかいこむ、はきこむ、刈りこむ、けずりこむ、きりこむ、そりこむ、しぼりこむ／
- ⑥ あがりこむ、しゃがみこむ、すわりこむ、たおれこむ／かたりこむ、はなしこむ、ねむりこむ／
- ⑦ 追むこむ、急きこむ、おさえこむ、ふうじこむ、のぞきこむ、だましこむ、まがりこむ、まげこむ、めくりこむ、めくれこむ／ねこむ、住みこむ、とまりこむ
- A2(ア)① くいこむ、くりこむ、つつこむ、ひつつこむ
- ② ぶちこむ、ぶっこむ、ふりこむ
- A2(イ) さしこむ、ふみこむ／あてこむ、たたみこむ、たらしこむ、のみこむ、はりこむ、みこむ／いれこむ、うちこむ、たれこむ／つけこむ、はりこむ、もうしこむ／うりこむ／きめこむ／ふれこむ、
- B(ア)① いらこむ、すっこむ、談じこむ、なだれこむ、ねじこむ、のめりこむ、めりこむ、へこむ
- ② 鑄こむ、くけこむ、しこむ、たくしこむ、ねじこむ
- B(イ) 咳きこむ、へたりこむ、めかしこむ／しこむ

IV 2 <「～こむ」の分類表>



まとめ

今回の分析の中で大きな位置を占める「格支配」と「前項動詞の種類」いう観点から複合動詞「〜こむ」をみてみると、前項動詞の違いにより次の二つに大きく分けることができる。

a: 前項動詞が単純動詞のとき、複合動詞「〜こむ」の格支配と異なる格支配をするもの。

b: 前項動詞が単純動詞のとき、複合動詞「〜こむ」の格支配と同じ格支配をするもの。

aに属するものは前項動詞が単純動詞のとき、動作の方向を示す「〜に／へ」を必須補語としないものであり、ここではA1ア)の①②⑥に属する語にあたる。(分類表参照)

bに属するものはa以外のもので、A1ア)の③⑧とA1イ)の①⑦である。bに属する「〜こむ」の表現は「こむ」をとっても一つの文として成り立つ。日本語学習者にとっては前項動詞の格支配をきちんと押さえておけば、学習段階の早い時期から「〜こむ」の表現が可能になってくると考えられる。aに属するものは、「内部移動」の具体的な説明に当たる語である。

「内部移動」の用法では、「こむ」は前項動詞が自動詞のものにも、また他動詞のものにも後接するが、その後接方

法には一定の傾向がみられたことがあげられる。複合動詞「〜こむ」の自他とそれぞれの前項動詞の自他とは無関係ではなかった。複合動詞「〜こむ」全体が他動詞の場合には前項動詞も他動詞であり、自動詞はない。複合動詞「〜こむ」全体が自動詞の場合は、前項動詞が動作の方向を示す「〜に／へ」をとるものではなく、前項動詞も自動詞だけであったが、「〜に／へ」を取らないものでは前項動詞には自動詞も他動詞もみられた。

また、「こむ」は、複合動詞の後項に立つことが最も多い動詞(森田一九七八)としてあげられていたが、「こむ」が最も多くの前項動詞に接続することができるのは、「こむ」の用法の中に「内部移動」と「程度進行」の二つの用法があるということが要因の一つであると考えられる。「〜こむ」は「内部移動」と「程度進行」の用法をもつことで、動作動詞だけでなく状態動詞も前項動詞となるので、前項動詞となりうる動詞の数が多くなると考えられる。姫野氏によると「こむ」のほかに同じく内部移動を表すものとして「〜こめる」「〜いる」「〜いれる」があるが、この中で「程度進行」の働きを持つものは「〜いる」だけである。しかし「〜いる」全体の数は39語しかなく、その数は少ない。

「今後の研究課題」「〜こむ」についての分析だけでは、

他の複合動詞との関係について明確な違いや、重なる部分などを比較するには不十分であったので、今後「くこむ」と似た複合動詞の表現を分析していくつもりである。それらの表現と「くこむ」の類似点、相違点を明かにし、「くこむ」の用法の分類で未解決の部分为解决する糸口を探したい。

また、「くこむ」の表現のうち、今回の分析の条件を満たしていながら不自然に思われるものと、そうでないものの違いがどこから出てくるのかという点を明らかにし、日本語学習者の表現の誤りが、どのような点で誤りなのかを知る手掛りとしてほしい。

〈参考文献〉

石井正彦 (一九八三) 「現代語複合動詞の語構造分析に
おける一観点」『日本語学』二一—八 明治書院
〃 (一九八四) 「複合動詞の成立—v+vタイプ
の複合名詞との比較—」『日本語学』三一—一
明治書院
影山太郎 (一九九三) 『文法と語形成』 ひつじ書房
斎藤倫明 (一九九二) 『現代日本語の語構成論的研究』
ひつじ書房

佐治圭三 (一九九二) 『日本語の表現の研究』 ひつじ
書房

塚本秀樹 (一九九三) 『複合動詞と格支配—日本語と朝
鮮語の対象研究—をめぐって』仁田義雄編
くろしお出版

寺村秀夫 (一九八四) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』
(第5章格言の文) くろしお出版

長嶋善三 (一九七六) 「複合動詞の構造」『日本語講座
4 日本語の語彙と表現』大修館書店

姫野昌子 (一九七八) 「複合動詞「くこむ」および内部
移動を表す複合動詞」『日本語学校論集』5

森田良行 (一九七八) 「日本語の複合動詞について」
『日本語と日本語教育』凡人社

森田良行 (一九九四) 『動詞の意味論的文法研究』明
治書院

森山卓郎 (一九八八) 『日本語動詞述語文の研究』明
治書院

寺山秀夫編 (一九八七) 「複合動詞の成立条件」『ケース
スタディ日本文法』桜楓社

〈複合動詞「くこむ」の分析対象資料〉

田中康仁 (一九八九) 「語と語との関係解析用資料」—

朝日新聞記事データ分析ソフトを中心とした

「CD-ROM版 新潮文庫の100冊」 新潮社版

「基礎日本語辞典」 森田良行 角川書店

「現代国語例解辞典」 林巨樹 小学館

「類語国語辞典」 大野晋、浜西正人 角川書店

「角川古語大辞典」 中村幸彦 他二名 角川書店

「計算機用日本語基本動詞辞書IPAL」(basic

verbs) — 辞書編 — (一九八七) 情報処理振興

事業協会技術センター